

果をタイムリーに登録し、公開していくことが重要であるということを、改めてすべての教員へ訴えていくことが必要である。

2. 『神学研究』

例年、発行部数は500部であるが、学内外の機関に広く頒布され公開されている点は評価できる。

今後はこの成果を、学部・研究科学生へ研究演習や講義の場で広報し、あるいは研究指導や講義の教材として生かしていくなどの新たな利用法を考えてもよい。

3. 学内外の宗教活動

学内外の教会活動における講演や説教を通じ、広く学外の人々、あるいは伝道者を目指す学生へ実践的に情報を発信しているという点において大いに評価できる。

(改善の具体的方策)

1. 関西学院大学研究業績データベースについては、継続的に説明会を開催し、その重要性を訴える場を設ける。
2. 『神学研究』は、単に発行するだけに留まらず、その成果利用の新たな方法を模索する。
3. 以上のような事項を検討・実施するため、神学部内に研究推進担当の教員を設ける。

1.2.4.2 研究活動

【評価項目 9-2-1】 研究活動

(必須要素) 論文等研究成果の発表状況

(選択要素) 国内外の学会での活動状況

(選択要素) 当該大学院・研究科として特筆すべき研究分野での研究活動状況

(選択要素) 研究助成を得て行われる研究プログラムの展開状況

<2003年度に設定した目標>

1. 神学部・神学研究科全体での研究成果の現状把握と情報整理。
2. 不足している研究領域、また成果の見込みのある研究領域を検討する。
3. 上記施策を推進するために、研究推進担当の教員を置く。

(現状の説明)

神学部の教員による研究活動は、主として以下の5つの領域において行っている。

1. 国際的な領域

2002年度～2004年度の主な活動は以下のとおりである。

2002年度：5th Asia-Pacific Hospice Palliative care Conference (大阪)

招待講演

The 20th International Conference on Death and Bereavement

(カナダ・オンタリオ) 研究発表

古代キリスト教研究会・アウグスティヌス国際学会 (ローマ) 講演

2003年度：第2回韓国・日本国際キェルケゴール・カンファレンス（韓国・高麗大
学校）本学神学部韓国キェルケゴール学会、日本キェルケゴール研究セ
ンター（事務局は本学神学部）共催：研究発表

2004年度：The 7th International Congress on Pastoral care and
Counseling（インド・バンガロール）研究発表

Plenary Commission on Faith and Order of the World Council
of Churches（マレーシア・クアラルンプール）研究発表・討議
韓日交流と宣教の課題（韓国メソジスト神学大学）招待講演

2. 対外的で、国内的な領域

神学部・神学研究科の教員は、全国的な学会活動に一会員として参加しているだけで
なく、その事務局の任を負うなどして、しばしば本学において全国的な規模の学会を開
催している。日本基督教学会、キリスト教文化学会、日本組織神学会、日本キェルケゴ
ール研究センター、日本新約学会、キリスト教史学会、キリスト教教育学会、実践神学
研究会、中世哲学会等である。また宗教学会、医療学会などでの研究発表、講演も多い。

2002年度～2005年度の主な学会活動は以下のとおりである。

2002年度：日本臨床死生学会（上智大学）研究発表

関西新約聖書学会 研究発表

日本宗教学会（大正大学）研究発表

2003年度：日本宗教学会（天理大学）研究発表

キリスト教史学会全国大会（関西学院大学）研究発表

日本基督教学会近畿支部会（関西学院大学）

2004年度：第9回緩和医療学会総会（札幌コンベンションセンター）招待講演

2005年度：9月に日本基督教学会全国学術大会が開催される予定。

3. 学内全体における領域

1996年に神学部教員や各学部宗教主事などを構成員として設立された「キリスト教と
文化研究センター」を拠点に、2003年度は、大学共同研究に採択された『現代の暴力と
キリスト教に関する総合的研究』が推進された。これは本学部4名の執筆を含め、2005
年3月に『暴力を考える－キリスト教の視点から－』として成果を見た。また研究プロ
ジェクト『スピリチュアリティと宗教』は、2004年8月に『スピリチュアルケアを語る』
としてその成果が公表された。なお、2004年度には「キリスト教と平和戦略研究センタ
ー」構想として、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサー
チ・センター整備事業）に申請を行ったが、不採択であった。

「人権教育研究室」における人権問題研究への参加や「学院史編纂室」における関西
学院史の資料収集および研究活動への参加も活発である。

4. 学部内の領域

神学部内では、毎月定期的に「神学研究会」を開催し、学問的、専門的な研究発表の
場をもっている。この研究会には他大学・外国から講師を招くこともある。2003・2004
年度はいずれも7回開催、5名の教員が研究発表を行った。教員の研究成果は、毎年度1
回発行の神学部紀要『神学研究』（2004年3月第51号、223頁、本号には8名の教員が執

筆、2005年3月第52号、252頁、本号には5名の教員が執筆）となり、多くの卒業生や大学院生も論文を寄稿している。また、各研究機関や諸大学、一般に広く頒布しているものでもある。

欧文による論文の場合は、主として大学全体の『欧文紀要』（2005年度から『外国語紀要』に改称）毎年2名の教員が執筆するようにし、研究成果を海外へ向けて公表している。

5. 個人のレベル

教員は各自個人レベルでの研究活動をたゆみなく行っているが、それらは主として学会での研究発表、学部紀要『神学研究』および他の学術雑誌に論文として公表しているものである。これらの活動は研究業績データベースとして、ウェブ上に広く公開している。また、個人研究の実績に科学研究費補助金の申請状況が考え得るが、ここ3、4年間は滞っており、2005年に1件の申請（結果は不採択）があったのみである。なお、神学部における2000年度から2004年度までの論文等研究成果の発表状況は次のとおりである。（「関西学院大学研究業績データベース」に基づく）

年度	著書	論文	リファ付論文	学会報告	学術発表	翻訳	調査報告	書評	評論	事典	辞典	講演	招待講演	特許取得	特許出願
2000	3	15	0	1	0	1	0	0	0	0	0	27	3	0	0
2001	3	18	1	5	0	0	0	0	0	0	0	18	4	0	0
2002	6	20	1	5	0	4	0	5	0	0	1	40	5	0	0
2003	8	18	1	1	0	4	0	1	1	1	0	39	3	0	0
2004	12	15	0	1	0	3	1	2	1	0	0	35	4	0	0
計	32	86	3	13	0	12	1	8	2	1	1	159	19	0	0

（点検・評価の結果）

1. まず、研究業績データベースなどの情報更新をさらに徹底することによって、神学部・神学研究科全体の状況を把握することが必要である。その上で何が足りないか、何が可能かを十分に検討する。
2. 科学研究費補助金など、外部資金による研究活動に積極的に取り組んでいくことが必要である。
3. 神学部・神学研究科のような小規模な組織においては、大学や学部の運営につき1名の教員が複数の委員を重複して担当している。運営業務における負担が、教員の研究時間を奪う結果になっている。

（改善の具体的方策）

1. 成果の情報を整理する。
2. 研究費補助金など外部資金獲得に取り組む。そのために、まずは申請件数の増加を図る。
3. 著作の刊行推進のため、大学や学部運営の業務（大学・学部における各種委員会）の数を縮小し、研究に専念できる環境を整備する。
4. 学部間学術文化交流協定を締結しているベルン大学との共同研究の企画を進める。
5. 以上のような施策を推進するために、2005年度から学部長室委員に研究推進担当の教員を割り当てる。